

2018 年度

点検・評価報告書
－アセスメント結果の概要－

理工学部

平成30年度自己点検評価報告 理工学部

1. 学習アセスメントの実施

平成30年度より3段階のアセスメントの第1段階であるタッチストーンのアンケート調査を、1年次春学期の必須科目「プロジェクトスタディーズA」にて実施した。当該科目は少人数のチームによるプロジェクト・ベースド・ラーニングであり、元々、各チームの独創性を重視し、企画書、中間報告書、成果報告書および発表会という形式をとっているため、各段階における学生自身による振り返りは担当教員による助言とティーチングアシスタントの大学院生による補助により、随時行われており、新たに導入されたアンケートでも、期待された効果がある程度上がっていることが確認された。

今後は平成30年度以降入学生を対象に、1年次「初年次プロジェクト」、3年次「ケーススタディ」、4年次「演習I」にて実施する。

課題：3年次「ケーススタディ」の授業計画は「プロジェクトスタディーズ」のような統一された段階的手順が保証されておらず、担当教員に任される部分が多い。2020年度の実施時には、この点を踏まえた授業計画についての原則を事前に確認する必要がある。2021年度よりアセスメント実施予定の4年次「演習」では同様の問題に加え、就職活動などの状況次第で、受講学生の学習の進捗が揃わない恐れがあるため、そのようなケースへの対応についての原則を決めておく必要がある。

2. 学生を交えたアセスメント

A. 授業アンケートシンポジウム

理工学部では平成18年度より、学生と教員を交えた「授業アンケートシンポジウム」を、学生主導で毎年開催しており、アンケート結果についての学生独自の分析と考察の発表、および、複数の教員と学生を含む少人数によるグループ討議と、そのまとめを実施している。

効果：授業の趣旨、教授方法、学習方法、カリキュラム、等について忌憚のない意見交換により、相互の理解と、効果的な授業の使い方など、授業運営と受講姿勢の双方について、メタ認知的な視点を持つ機会が提供され、それぞれの立場からの振り返りによる改善が期待できる。

課題：参加者数が減少傾向にあり、平成29年度の会では、主催者側の学生からも意義と参加啓蒙の意欲について当初の趣旨が忘れられているのではないかと懸念が表明された。学生・教員間の対話や授業のあるべき姿、大学への関与の姿勢について議論があったが、そもそもの大学の存在意義について再確認を繰り返す必要がある。

B. 学部協議会

学生自治会、学友会、学部企画の代表学生、理工学部事務室職員代表、および、教員代表による「学部協議会」を年に4回程度実施し、学生からの要望や行事の持ち方などについて、学生主導にて活動の報告や意見交換を行っている。

効果：女性専用休憩スペースの新設や自習スペースの環境と利用可能時間帯など、大学内における学生生活環境に関する話題が多いが、授業改善に関連して「授業アンケート」では見えにくい教室や教具関係の改善提案もしばしば出され、老朽化した机椅子の交換や、空調や教材表示装置の次期入れ替え時における要求仕様策定の重要な参考になっている。

課題：学生による意見集約の蓋然性や客観性が不十分であるケースが見受けられるが、協議会の中で、それらの視点についても議論するようにしている。